

近代マレー・ムスリム世界の集団形成 ——ウィリアム・ロフとマレーシア研究——

坪井 祐司

2013年5月2日にマレー・イスラム世界の歴史研究で広範な業績を残したウィリアム・ロフ先生（コロンビア大学名誉教授）が逝去された（以下敬称略）。

ロフは、船員などの勤務経験の後ニュージーランドで修士号を取得し、オーストラリア国立大学で本格的な研究活動に入った。1959～61年にはマレーシアのクラン近郊に滞在して現地調査を行い、1969年にコロンビア大学に移る前にマラヤ大学で教鞭をとったこともある。

私事ながら、筆者が初めてロフの著作に触れたのは、大学の学部生のときに東南アジア史のゼミで講読した *In search of Southeast Asia : a modern history* (D.J.Steinberg (ed), 1985, University of Hawaii Press, 初版は1971年) であった。ロフが研究を始めたころの東南アジア史研究においては、東南アジア諸国の独立を受けて、それまでの欧米諸国の植民地史としての歴史から現地語史料を利用した「自律的な歴史」が求められていた。*In search...*は、フィリピン、タイ、ベトナムなど東南アジア各国の専門家が集まって東南アジア近代史の再構成を目指した著作であり、マレーシアを専門とするロフはその著者の一人であった。

ロフ個人の研究も、現地語による地域に立脚した歴史研究という時代の潮流のなかに位置づけられよう。彼が集中的に利用したのが、ジャウィ（アラビア文字表記のマレー語）史料や聞

き取りであった。これまで利用されてこなかった史料を用いてマレー・イスラム世界の近代史を描いたのである。彼は、マレーシア、シンガポール、イギリスなどに散在していたジャウィの新聞・雑誌などの定期刊行物を包括的に利用した。彼の業績の一つは、ジャウィの定期刊行物に関する体系的な所蔵目録を作成したことである（*Bibliography of Malay and Arabic periodicals published in the straits settlements and peninsular Malay states 1876-1941 : with an annotated union list of holdings in Malaysia, Singapore and the United Kingdom* (1972, Oxford University Press)）。筆者は現在「ジャウィ文献と社会」研究会においてジャウィの研究グループを組織しているが、近代以降のジャウィ研究に関してはロフを抜きに語ることはできない。

ロフの代表作 *The Origins of Malay Nationalism* (1994, Oxford University Press, 初版は1967年)は、彼の学位論文をもとにした著作である。これは、19世紀から第二次世界大戦に至るまでのマレー民族の形成過程を描いており、マレー・ムスリムの自画像の探求を近代史に重ねたものである。

そこでは、マレー・ナショナリズムの持つ様々な側面が明らかにされているが、最も重要なのはその担い手の多様性であろう。ロフは、その起源をシンガポールというメトロポリスにおけ

る文化運動から説きおこしている。そこに集った人々は、マレー語を共通語とするが、民族的には多様であり、中東やインドからの外来者や混血者が影響力を持っていた。このことは、均質な民族を求めるナショナリズムの性質と一見矛盾するように思われる。しかし、人口が少なく移動を繰り返す海域世界において、多様な出自を持つ人びとが一つのまとまりを形成するという社会のあり方は、前近代における「マレー世界」論にも通底する。マレー半島という地域の特徴をとらえた視角といえるだろう。

その後のイギリスの植民地統治の過程で、①親英的な王族・貴族、②イスラム志向の知識人、③教員などのマレー語教育を受けた知識人といったマレー・ナショナリズムの新たな担い手が登場する。なかでも①が主導権を握り、外来者・混血者は排除されていく。この主張は、その後のナショナリズム、戦後の独立をめぐる政治史の研究においても定説となった。

ロフの研究のもう一つの柱は東南アジアのイスラム研究である。社会と宗教との関係は、彼の議論に常に念頭に置かれる視角であった。もちろん、この視角はマレーシアという国家の枠内にとどまるものではない。ロフのイスラム関連の論文を集めて最近出版された *Studies on Islam and society in Southeast Asia* (2009, NUS Press)では、東南アジアにやってきたアラブ人の役割や東南アジアからのメッカ巡礼など、東南アジアと西アジアの人の往来に関する論文が多数収録されている。

同時に、マレーシアのイスラムについても多

くの著作がある。とくに最もイスラム色が強いといわれる東海岸のクランタン州に強い関心を持っており、編著の論文集である *Kelantan: religion, society, and politics in a Malay state* (1974, Oxford University Press)は、同州に関する基本的な文献の一つである。また、1980年代まで視野に入れてマレーシアの「イスラム化」を概観した論文が前記の *Studies on Islam...*に収録されている。近年研究関心を集めている現代マレーシアのイスラム研究においても、ロフの提示した歴史的な視角は参照に値するものであろう。

マレー民族やイスラムといった彼の研究テーマからは、彼が人間集団の形成のプロセスの解明を目指していたことがうかがわれる。このため、マレー半島を主な研究対象地域としながらも、そこから海域東南アジア、そこから中東にまで広がる人間のネットワークに焦点があてられた。これは、JAMSにおいて「マレーシア研究」をマレーシアという国家に限定せず、より広い地域や人びとのネットワークの研究を包括する概念としてとらえているのと親和性があるように思われる。社会の流動性の高いこの地域の研究においては、より広い視角が求められる。古典とされる *The Origins of Malay Nationalism* の著者としてだけでなくマレーシア研究の先駆者としてもロフの貢献と影響力は大きいといえるのではなかろうか。